

令和5年度 第5回 紀南高等学校 学校運営協議会 議事概要

日 時	令和6年3月7日（木）19：00～20：45
場 所	紀南高等学校会議室
出席者 (敬称略)	辻本、山本、長阪、廣畑、田尾、産屋敷、二村、立嶋、中嶋、湊健、舛屋 (県教育委員会) 大屋、加藤 小林 (紀南高校) 辻、込谷、湊千、松本
欠席者 (敬称略)	西、岩本
議 事	<p>1 報告事項</p> <p>(1) 第4回学校運営協議会議事概要について</p> <p>(2) 対話集会について</p> <p>(3) 本校の取組について</p> <p>(4) 第8回紀南地域新高等学校ワーキング会議・各部会検討事項について</p> <p><u>質問事項：特になし</u></p>
主な意見	<p>2 協議事項</p> <p>(1) 学校マネジメントシート年度末評価について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・しっかり取り組んでいると思うが、具体的な内容が伝わってこない。</li> <li>・働き方改革推進の指標となるストレスチェックの結果は閲覧が可能か。</li> </ul> <p><u>⇒本校の内容については来年度最初の学校運営協議会にて資料として提出する予定である。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・支援が必要な生徒への対応はありがたいが、具体的な指導体制について示してもらいたい。</li> </ul> <p><u>⇒学校だけでは解決が難しいケースが増加しているため、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと共に組織として対応している。家庭への精神的・経済的支援が必要な場合があるので、学校運営協議会委員の力をお借りしたい。</u></p> <p>(2) 新高等学校の紀南校舎の今後のあり方について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・令和6年度は最後の入学生となるが、学校運営協議会は令和9年度以降どのような形になるのか。</li> </ul> <p><u>⇒紀南校舎としてコミュニティ・スクールは継続するので、学校運営協議会の意見を基に今後も学校運営をしていく。木本校舎は検討中。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・令和12年度で紀南校舎を閉じる話も聞こえてくる。残そうと思って頑張っているのに残念だ。</li> </ul>

⇒地域の心配もあるが、「なくしてはいけない学校」となるように特色化をアピールしていく。

⇒（県教委）令和12年度にクラス数を減らすことを目指すのではなく、残すことを考える。新高等学校が始まり2年が経つ令和9年度を目途に学校の姿で今後のあり方が見えてくる。紀南は1つという思いを持って、子どもたちが分断することのないようにしたい。

- ・ 県議会で議論になっているが、新高等学校の名称は変更する可能性があるのか。子どもたちアンケートをもとに決めたものが、なくなってしまうなら信頼をなくすのではないか。

⇒（県教委）県議会での議論になる。◆3月8日、常任委員会で新校名は可決。

- ・ 三重大学が進める「みどりのアントレプレナー」と連携することで生徒が夢を持てる教育が出来るのではないか。市町と共に積極的に参加して紀南校舎で率先垂範して地域で進めてほしい。

⇒地域の活性化は目指す方向が同じ。今後具体的に考えていく。

- ・ 令和12年度は4クラス規模になる。それ以降残っていくことが必要。今後、就労体験（長期インターンシップ）を町役場で始めるためのルートも探ってもらっている。しかし、令和6年度の入学者選抜の進路希望調査の推移をみると、7月以降、近大新宮へ多くの生徒が流れていった。木本高校普通科の進路指導がどのような結果に繋がったのか説明できていないので、生徒のニーズに応えられない。普通科改革が早急に必要である。また、両校がそれぞれの価値を見出して、中学生から選ばれる学校にするべきである。

⇒熊野青藍高校として、全体で共有して中学生のニーズに応えていきたい。そのためにも、令和6年度から両校の運営協議会や職員会議に両校長が出席していく予定である。出来れば学校運営協議会にも傍聴として招き、委員の方の意見を直に聞いてもらいたいと考えているかどうか。

- ・ 校長だけでなく、実務を担当する主任の先生にも声をかけ、モチベーションを挙げてもらいたい。
- ・ 連日新聞をにぎわせてきた校名の件について、このような声が上がった背景を考えると一体感を持っていけない気がする。せつかく1つになることが決まったのに、残念。
- ・ 紀南校舎は1クラスでも残したい。
- ・ かつては地元の大企業へ就職を目指して、多くの生徒が紀南高校へ入学してきた。紀南校舎へ来たら、希望の就職先に繋がるという信頼を得ていくべきである。

・校舎別にものを考えるのではなく、本来は新高等学校全体としていくべき。熊野青藍高校もコミュニティ・スクールとなれば全体としてできる。本校で15年以上培ってきたものを活かして進めたい。

⇒委員の方の意見をしっかり木本高校にも伝えて、新高等学校への準備を進めていきたい。

⇒（県教委）新高等学校への委員の方の思いに感謝している。熊野青藍高校を魅力あるものにすべく、地域の方とともにコミュニティ・スクールのあるべき形を作り、紀南ならでの魅力を大人が子どもたちに提供していきたい。

### 3 連絡事項

(1) 来年度の会議予定等について